世のため人のため他人のやれないことをやる

日本繊維業の草創期を切り開き、世界に冠たる独自技術を打ち立てたクラレに、一貫して流れている「人真似はよくない」へのこだわりと、「エンド・ユーザーにとって便利なもの」への徹底した追求は、どのようにして生まれたか。

「人真似はよくない」という初代からの思想に一貫してこだわり〝国内資源〟で繊維を生産

片方―私は一九六八(昭43)年に、何代目の方でしたか、クラレの社長さんにお目にかかったことがあります。

和久井―そうですか。私は八代目です。

片方―たまたま、ある出版社が少年・少女向けに、ガガーリンの「地球は青かった」をはじめ、次代に残したいような記録を本にしたいということで、『二十一世紀の記録』三十巻を企画しました。その十四巻目の「繊維の革命」に、デュポンのナイロンの話をとりあげてくれと言われたわけです。

和久井―はい。

片方―しかし、国産を誇る唯一の会社として、クラレの合成繊維がある。これこそ記録として残すべきではないか、と提案して執筆させていただきました。そのときお会いしました。

和久井―私は、当時のことは知りませんでしたが、本当にいい本を書いていただいてありがとうございました。

片方―いえいえ。和久井さんは当時、クラレにお入りになっていたのですか。

和久井―ええ、入っています。戦後間もなくは、戦争で設備が破壊され、繊維の生産能力はかなり落ちていたようです。そこで、木綿(もめん)や羊毛は輸入に頼っていたのですが、経済安定本部が、合成繊維を振興しなければならないと、ナイロンとビニロンの企業化を、当時、東洋レーヨン(東レ)と倉敷レイヨン(クラレ)にさせようとなったのです。倉敷レイヨンはビニロン――すでに技術的には確立していましたが――の企業化をすすめました。

当時、ナイロンは着る物に適さないが、絹より丈夫で、しかも軽いので、女性のストッキングに使われました。それは大ヒットとなり、東レの飛躍のステップストーンになりました。いっぽう、当社のビニロンは木綿にかわる合成繊維として、あらゆる着る物に適するという想定のもとに企業化しましたが、あにはからんや、染色